

B 48 衣料による皮膚障害の最近の動向とユーザーの衣生活態度にみられる問題
(第3報) 防止対策の実践に注目して

山口大医・公衛 酒井恒美 大阪教育大 ○奥窪朝子

目的 本報は第2報での成績をふまえ、SLCを防ぐための対策の実践を喚起することを目的として、ユーザーが講じている対策の実態とその効果、ならびに実践態度を支配している要因についての追究を行った。

方法 第2法におけると同様である。

結果 1) SLCの経験のある者821名のうち、何らかの防止対策を講じている者は250名31%で、対策実施後にもSLCを訴えた者は37名(15%)に過ぎなかった。いずれの訴えも軽い障害であった。その対策内容は多岐にわたるが、①肌着類は綿製品を買う、着る62%、②セーターやナイロン製品などは直接はだに接して着ない31%、③新しい肌着は洗ってから着る26%が上位を占めた。このような容易に行いうる対策がSLCの防止に有効であることは注目に値しよう。2)何らかの防止対策を講じている人は、①衣料処理剤についての法的規制および公害用語についての知識度が高く、②SLCに対して正しい認識を持ち、③かぶれの経験があり、④肌着の条件としての吸湿性を求め、綿製品志向であり、⑤20歳代以外の年齢層に多く、⑥公害と健康についての新聞記事をよく読み、対策を講じていない人におけると対照的であることがわかった。3) SLCの経験を訴えながら、原因と思われる衣料をそのまま着ている者の率の推移を30~59歳の女性についてみると、1981年での30%は、1971年(10%)および1977年(14%)に比し有意の高率を示した。

以上の成績は、SLCの防止にユーザーの衣服衛生にかかわる基本的な生活態度の認識とその実践の必要性を示唆しているように思われる。